哲学の探求第47号 哲学若手研究者フォーラム 2020年6月（27-58）

# 反省会としてのメタ哲学[1]

村山 達也

哲学史研究とはいかなる営みであり，いかなるあり方を目指しているのか．この二つの問いに答えることが，本稿での私の目的である．ただし，ここでの議論は，私が採用する特殊なアプローチのせいで，こうした問題設定が予想させるであろうよりも遥かに実地に即した仕方で行なわれる．そのアプローチとは，私自身の過去の研究発表というごく限られた素材を分析して，あくまでその僅かな材料から言える範囲で，上記の問いに答えるというものである．論じる問いも，できるだけ，素材から引き出したままの具体的なものにする．「重要単語の用例集はどうすれば作れるのか」とか，「成果発表の際に，一本の発表ないし論文として十分かどうかはどう見積もればよいのか」といった問いである．自分自身を題材とした事例研究をつうじて，哲学史研究をめぐる問いを立て，それらの問いに，部分的には哲学的であろう仕方で取り組もうというわけである．哲学についての哲学，すなわち「メタ哲学」という，次節でやや詳しく説明する言葉を用いて言えば，本稿が提唱し，実演するのは，ボトムアップ型のメタ哲学（自己分析編），ないし，反省会としてのメタ哲学ということになるだろう[2]．

これも後述するように，メタ哲学には他にもさまざまなやり方がある．そのなかでも，このアプローチには参考にできる類例があまりなく[3]，本稿の分析は多分に試行的なところを残している．そのため，対象となる事例にいろいろな論点から手探りで迫り，いささか雑多な話題を扱うことになる．一研究者の舞台裏を開陳することで，哲学史研究の手順や評価方法について，改訂なり増補なりしてもらうための叩き台となる考察を提示することが，本稿の主な作業をなす．言い換えれば，本稿は，そうした仕方で，冒頭で提示した二つの問いに答えるわけである．

叩き台とは言っても，私自身の，しかもたった一つの事例という点は，読者

を訝しませるに十分かもしれない．哲学史研究という多様な営みについて，ただ一つの事例を分析しただけで何が言えるというのか．自分の研究が哲学史研究の典型例，ないし代表例だとでもいうつもりなのか．こうした批判については，次節で，メタ哲学の説明と併せて，その説明を踏まえて応答する．ここでは，自分自身を題材としてメタ哲学の事例研究を行なうことの，四つの利点を指摘するにとどめておこう．第一に，最もつまらない利点として，対象がもつ欠点を何の気兼ねもなく論うことができる．第二に，対象となるテクストを理解するのが容易である．過度に懐疑的になるのでない限り，本人こそが，テクストの文字どおりの意味（例：誰かを絶賛している）についても，そのテクストによって著者が意図したこと（例：皮肉を言う）についても，ひとまずは一番の権威であり，理解者なのである[4]．さらに，第三の利点として，論文や発表という成果物だけでなく，準備過程や，公表後の経過も，簡単に分析対象にできる．実際，事例研究の箇所を読まれれば分かるとおり，それらを視野に入れたからこそ問題にできたことは多いのである．そして最後に，このやり方は，哲学や哲学史研究を行なったことのある人なら誰でもすぐに始めることができる．ただし，これが利点であることを説得的に示すには，メタ哲学という営みをもう少し説明しておく必要があるだろう．そろそろその作業に移ることにする．

というわけで，第一節ではメタ哲学を概観し，それを踏まえて，ボトムアップ型メタ哲学という営みの正当化を行なう．第二節が，本論文のメインをなす事例研究である．最後に，第三節で，本稿の成果を総括する．事例研究だけでも理解できるように書いたつもりなので，場合によっては第一節は飛ばしていただいて構わない．

導入部の締め括りとして，用語上の取り決めを少しだけ．まず，「哲学史」という語は，哲学の過去とそれについての研究との両方を指示しうる．本稿では，哲学の過去を「哲学史」と呼び，それについての研究は「哲学史研究」と呼ぶ．次に，「哲学」という語は，基本的には哲学史研究を含む意味で用いる[5]が，ときには哲学史研究と区別した意味で――哲学的問題そのものに取り組むといった意味で――用いる．哲学と哲学史研究とを対比したり，あえて併記したりしたい場合である．やや曖昧ではあるが，煩雑さを避けるための処置であ

り，それほどの不明瞭さは生じないと思う．最後に，「方法」と「方法論」も用法が著しく混乱した言葉である．本稿では，手続きやアルゴリズムそのものを「方法」，それについての言説や考え方を「方法論」と呼ぶ．「方法論」に関してはこれでも随分と大雑把な限定にしかなっていないが（これだと，方法の定義も，方法をめぐる議論も，ある方法についての説明も，すべて方法論ということになってしまう），実のところ本稿ではこの語はほとんど登場しないので，当座の用にはこれで十分である．

## 1. ボトムアップ型メタ哲学の説明と正当化

### メタ哲学とは何か[6]

メタ哲学とは，哲学についての哲学，すなわち，哲学をめぐって生じるさまざまな問いを論じる哲学である．もちろん，哲学をめぐって生じる問いと一口に言っても多種多様である．「書店の哲学コーナーにはどんな本が置いてあるのか」，「哲学科の構成員の男女比はどう変化してきたか」，「親戚の集まりで「哲学って何をするの」と尋ねられたらどう答えるのが正解なのか」といった問いは，いずれも哲学をめぐって生じているが，すべてが同じ程度に哲学の主題となるわけではあるまい．では，メタ哲学が扱うのは，はたしてどのような問いなのか．メタ哲学も哲学である以上，それは言うまでもなく，哲学的な問いである．――さて，ここには既に，「哲学的であるとはいかなることか」という，それ自体メタ哲学的な問題がある．だが，いまはこの問いは措いておき，いくつかの典型的な問いを例として挙げることで，メタ哲学とは何かを示すことにしよう．すなわち，メタ哲学とは，「哲学とは何か」，「哲学はいかなる方法を用いるのか」，「哲学理論の優劣はどのような基準によって判定されるのか」，「哲学はいかなる意義をもつのか」といった問いを扱う哲学である．

典型的な問いだけでなく，典型的な答えも記しておいたほうが，イメージが掴みやすいかもしれない．「哲学とは何か」という問いに対しては，「真善美の探求」，「実在の探求」，「科学の基礎づけ」，「宇宙における人間の位置をめぐる根本的な問いの省察」などが，主題を提示して答える場合の典型的な

答えである．方法を提示するパターンなら，「弁証法」，「概念分析」，「超越論的な還元と構成」といった答えが与えられるだろう．なお，ついでに述べておけば，いまの例示からは次のことも読み取れる．すなわち，「メタ哲学」という名称こそ新しいものの，メタ哲学的な考察であれば，古代ギリシャから継続的になされてきた，ということである．もちろん，哲学は主題も方法も一見したところ極めて雑多であるし，何をもって哲学とするかということも，時代や地域によって大きく変化してきた．それゆえ，どのような答えに対しても容易に反例を出すことができようし，そのことからは，「結局のところ，大学で哲学の教員が教えているのが哲学だ」とか，「書店で哲学コーナーに分類された本に書いてあることが哲学だ」といった，デフレ的な答え――哲学という商品を安値で（＝緩い条件で）買えるようにする答え――が提示されたりもするだろう[7]．

「哲学理論はいかなる基準によって優劣を評価されるか」という問いも，少し説明しておこう[8]．哲学理論を評価する基準として，代表的には，「科学理論との整合性」，「説明の包括性」，「原理の単純性」などが挙げられる．例えば知覚の哲学なら，生物学や生理学といった科学理論とは整合的であることが望ましく，ふつうの知覚も幻覚も錯覚も説明できる包括性をもっていたほうがよく，その包括性は単純な仕方で――アド・ホックな原理を次々に導入したりはせずに――達成されているほうがよい．それらすべてを最高度に満たすものがあれば，それが哲学理論として最も望ましいものである．ただし，優劣の決定がそれほど簡単になされることはほとんどない．そして，例えば包括性において優っている理論と，単純性において優っている理論と，総合的に見てどちらがよりよいのかは，それほど自明な問題ではないのである．他にも，規範倫理学において，基本的な道徳原理から論理的に導かれた帰結が，直観的なアピール（常識との合致）をはなはだしく欠いているとき，論理的帰結と直観のどちらを優先すべきなのか――例えば，ある種の殺人が，常識的に考えると許しがたいが，基本原理からの論理的演繹によって推奨されるとき，そのことをどう評価すべきか――といったこと，より一般的に言えば，規範倫理学の理論の優劣はどのような基準によって測られるべきかといったことも，メタ哲学の領分に属する問題であろう[9]．

なお，メタ哲学は，記述的な問い（「現にどうであるか」）だけでなく，規範的な問い（「どうあるべきか」）も扱う．「哲学はいかなる問いを論じるべきか」，「どのような方法を用いるべきか」，「いかなる意義をもつべきか」といった問いである．近年盛んに行なわれている，哲学に変化をもたらそうとするさまざまな実践――非西洋文化圏に属する哲学的思考の掘り起こしや，哲学史上無視されてきた女性哲学者たちの再評価，応用倫理学や実験哲学の提唱など――は，そうした規範的な問いへの応答として位置づけることもできるだろう．

**批判と応答**[10]

さて，メタ哲学については，メタ哲学が立てる問いの価値に疑義を示し，延いてはこの営みそのものの価値を否定しようとする批判が，さまざまになされてきた．そのうちの一つは「面白くない」というものだが，これはたんなる趣味判断なので無視してよいだろう．それ以外の批判は大きく二つに分けることができる．「無益だ」というパターンと，「有害だ」というパターンである．

まずは「無益だ」というほうから．これは要するに，哲学にはもっと他に考えるべき，ベタの問題がたくさんあるのだから，自省などするだけ無駄だ，ということである．帰納法はいかなる認識的価値をもつか，出来事のあいだに成り立つ因果性とはどのようなものか，嘘をつくことはいかなるときでも許されないのか，演劇が喚起する感情は真正のものか，などといった，いわばベタ哲学における問いのほうが遥かに重要であって，こうした問いにこそ哲学者は取り組むべきだ，というわけである．

この批判には二とおりの仕方で反論することができる．その一つは，いま列挙した問いが重要だと思うなら，メタ哲学の問いも重要ということになるはずだ，という反論である．実のところ，上記の問いは意図的に選定したものであり，それぞれ科学哲学，歴史学の哲学，道徳哲学，芸術の哲学に属している．さていま，哲学は科学の一つだとしよう．すると，メタ哲学，言い換えれば，哲学という科学の哲学は，科学哲学の一つであり，生物学の哲学や物理学の哲学などの仲間であることになる．それらの科学哲学は重要だと考えるなら，特段の理由がない限り，哲学の哲学だけに重要性を拒否する謂れはないはずであ

る．いや，哲学は科学ではない，と言われるだろうか．そうだとしても，学問の一つではあろう．すると，先程と同じようにして，歴史学の哲学に重要性を認めておきながら，哲学という学問の哲学にだけ拒否する謂れはない，ということになる．いや，哲学は学問でさえない，と主張するとしても，それが人間の営みであることはさすがに否定できないだろう．すると，やはり同じようにして，道徳哲学や芸術の哲学に重要性を認めておきながら……ということになる．人間のさまざまな活動のうちで，哲学をよほど特別視するのでない限り，メタ哲学を貶める理由はないのだ．

無益だという批判に対する二つめの反論は，混ぜっ返しに聞こえるかもしれないが，メタ哲学的な問いは無益だという考えそれ自体が，何かしらのメタ哲学的な考えを前提している，というものである．どの問いが哲学的に重要であり，どの問いは考えるだけ無駄なのかを判断する際には，哲学とは何であり，何であるべきかについての考えが，背景にあるはずだからである．もちろん，何かしらの哲学観をもつこと自体に非難されるべきところはない．ただし，そうした哲学観をただ抱いているだけであるよりは，それがどのようなものであるのかを説明できたほうがよいだろうし，そのためには，自らの哲学観について反省する必要がある．そして，メタ哲学は，そのことに大いに役立つはずのものなのである．

ここで，そうした反省は（いわば）ベタ哲学をするうえで障害になるから，やはりやらないほうがよい，と考える人もいるだろう．これこそが，批判には二パターンあると述べたうちの第二のもの，すなわち「有害だ」というパターンの批判である．この批判は，メタ哲学のなかでもとりわけ方法論に向けて，「ムカデ効果 (centipede effect)[11]」とでも呼ぶべきものを指摘している．ライルの用いたアナロジーを借りるなら，脚の動かし方を意識しすぎるとうまく走れなくなるように，方法を反省しすぎるとうまく哲学できなくなる，というわけである[12]．

この批判にも二とおりの反論が可能である[13]．第一に，ムカデ効果が一般的に認められるものかどうかは疑わしい．確かに，足の動かし方を逐一意識したせいで走りがぎこちなくなることはありうる．また，没我的な集中が要求されるような場面では，方法を意識してしまうと邪魔になることもあるかもしれな

い．しかし，前もって走り方を学んでおいたおかげでうまく走れるようになることはある．走っている最中でも，腕の振り方や足の着地させ方を意識して癖を修正することはありうるし，熟練のランナーなら，その日の地面の状態に合わせて走り方を反省し，微調整することさえあろう．こうしたことがイメージしにくいなら，走ることよりも（少なくとも一見したところ）複雑な活動，例えば料理，フィールドワーク，家の建築などを考えられたい．こうした活動なら，方法について――事前であればもちろんのこと，最中であっても――反省することで，よりよい成果を上げる，という場面が想定しやすいだろう．そうであれば，推論や調査，執筆，対話といったプロセスを含む点で，やはりそれなりに複雑な，哲学という活動においても，方法を反省し，さまざまな方法の区別や分類といった整備を行ない，必要とあらば改善を施すことは，極めて有益なはずである．新規参入者向けのインストラクションとしても，また，長年携わっている者が能力を維持したり向上させたりするうえでも．

二つめの反論に移ろう．確認しておけば，もともとの批判は，方法のことは検討しないほうがうまくいく，というものであった．だが，方法そのものの有効性に疑いがもたれており，そのせいで，その方法によって得られた結論の信憑性も危うくなっているとしたらどうだろうか．そして実際，思考実験や，直観による正当化といった，哲学における伝統的な方法に対して，近年，哲学内部からさまざまな疑義が呈されている．例えば，全宇宙の運動が二倍速になったら意識は何を感じるかという思考実験[14]から，ある人は，経験内容が乏しくなることを意識は感じるはずだという帰結を引き出し[15]，ある人は，脳を構成する原子の運動も二倍速になるのだから意識はその変化を感じないという帰結を引き出し[16]，またある人は，あらゆる運動の速度が二倍になるなどという想定は意味をなさないと言う．一つの実験が，二つの相反する結論と，一つの拒絶という結果に終わるわけである．そうだとしたら，そのことは，そもそも実験しても検証としての価値はないということ，思考実験には，フィクションを用いて主張を例証するという，レトリックとしての意義しかないことを示しているのではないだろうか――こうした批判が思考実験には寄せられている[17]．また，直観による正当化については，ほとんどの哲学者は僅かな事例しか用いていない（多くの場合，本人の一例のみ）ではないか，とか，認知的バイアス

を避けるのが難しい，信頼性に対する保証があまりない，などの問題点が指摘されている[18]．いずれも，哲学の方法に対する，真剣な考慮に値する批判であり，これらが正しいとしたら，哲学の全体に甚大な影響を及ぼすことになる．完全に無視を決め込むわけにもいかないのである．

**ボトムアップ型アプローチとその正当化**

これまで，メタ哲学とはいかなる分野なのかを見てきた．では，いざ実際にメタ哲学に取り組むとしたら，具体的にはどのようなアプローチがありうるだろうか．網羅的であることは目指さずに，いくつか列挙してみよう．

一つには，これまで紹介してきたメタ哲学的問題をそのまま論じればよい．哲学とは何か，哲学に固有の方法は存在するか，理論を正当化するとされる直観それ自体はいかにして正当化されるのか．こうした問いを直接に考察すればよいのである．また一つには，哲学史上のさまざまなメタ哲学的見解を吟味することもできる．トマスはキリスト教と哲学との関係をいかに捉えていたか，スピノザはデカルトの方法論をどう批判したか，ヴィトゲンシュタインの言う「哲学的病の治療」とは正確に言っていかなるものなのか．これはこれで，かなり興味深い研究領域を，現に形成している．

他には，これも哲学史研究に類するものではあるが，誰かの行なった，メタ哲学とは関係のない研究を分析対象にして，その背景にある（しかし必ずしも明言されてはいない）メタ哲学的見解を剔抉し，吟味する，というやり方がある．対話編という形式がプラトンにとってもっていた方法論的意義，パスカル『パンセ』におけるロジックとレトリックの協同関係，二一世紀の哲学は自然科学の成果をどれだけ取り入れることができているか，などなどの論題を扱うアプローチである．

導入部で述べたとおり，本稿で私が採用するのはこの最後のアプローチであり，しかも「誰か」のところに代入されるのは私自身である．第二節では，ベルクソンにおける潜在性概念を検討した研究発表を分析の俎上に載せる．改めて言えば，ボトムアップ型のメタ哲学（自己分析編）を実演しよう，というわけである．

ボトムアップのやり方，要するに事例研究が重要であることは，特に説明を

要しまい．何について哲学するのであれ，問いが記述的であるならば，その何かの実情に即していなくてはならない．問いが規範的な場合でも，実情は踏まえておいたほうがよい．主な目的が実践の改善にあるならなおさらである．何をどう改善すべきなのか，その改善案はそもそも実行可能なのか，といったことは，実情を知らなければ判断できないからである．

いま述べたことから，冒頭部では言及するにとどめておいた点も説得的になっていよう．すなわち，自分自身を対象とした事例研究は，哲学の経験者なら誰でもすぐに始めることができ，これは一つの長所である，という点である．前項で主張したとおり，方法を反省することは改善に繋がりうる．また，いま述べたとおり，改善案を提示したり採用したりするには，まずは実情を知る必要がある．そして，実情を知る手間は，かかるよりはかからないほうがよいはずである．

とはいえ，これも冒頭部で触れたように，事例が一つというのは少なすぎると思われるかもしれない．自分の研究が代表例なり典型例だと自負する十分な理由がないならば，そんな僅かな事例からは何も言うことができないのではないか，そのような横着を許さない程度には哲学は多様なのではないか，と．

ごく手短に，三つの観点から答えておこう．第一に，これから分析する事例は，代表例でも典型例でもないかもしれないが，一例ではある．そして，どのようなものが代表例であり典型例であるかを決定する基準を手に入れるためにも，私たちはやはり一例から始めるしかないのだ．第二に，なぜ事例を限定してそれをじっくり検討するのかというと，繰り返し述べているとおり，哲学があまりに多様だからである．外延を不用意に増やすと，すぐに内包がおそろしく抽象的になる．すべてに共通する性質――哲学の本質なるもの――を探す前に，まずは僅かな事例に集中して，どのような特徴がそれを哲学にしているのかを考察したほうが，実りが多いように思われるのである．

第三に，実のところ，本稿でなされる主張は，事例の数を増やすことで補強される類いのものではない．私は次節で，事例を手掛かりに，例えば，哲学史研究が備えるべき理論的美徳を提案したり，テクストから用例を集めることが一般に含むはずの困難を定式化したりする．前者について言えば，ことが美徳に関わる以上，事例の数は問題ではない．人柄の美徳で考えると分かりやすい

だろう．ある性質なり能力なりを備えている人が多いか少ないかは，それが美徳であるかどうかとは無関係なのである．また，後者――用例集めに付きまとう困難――について言えば，重要なのは，当の困難が一般的な困難として理解可能なように提示されているかどうかであって，当て嵌まる事例がたくさんあるかどうかではない．言い換えれば，ここでは事例は，一般性を保証するデータではなく，一般的な仕方で提示されたものを分かりやすくし，かつ，それが現に存在することを保証するための，例示なのである．多くの人がはっきり意識しないままに出会っていたことに気づいてもらうためのもの，いうなら「リマインダ[19]」である，と言ってもよいだろう．――結局のところ，いま挙げたどちらの論点についても，事例の数は重要ではない．極端な話，当該の困難に人類史上で初めて直面したのがこの私なのだとしても，そして，当該の理論的美徳を備えた論文はこれまでに書かれたことがないとしても，問題ではないのである．

それでは，いよいよ事例研究に取り掛かることにしたい．以下では，私がかつて行なった研究発表について，どう準備し，どう書いたのかを，ある程度詳しく記述する[20]．そのうえで，いくつかの作業に注目して，「なぜ私はそれができたのか」を反省する．それによって，単純作業に見えることでも意外と複雑なプロセスを経ていることが明らかになるだろう．次いで，発表の事後処理（論文にするときにどう変更を加えたか，これからどう改善しようと思っているか，など）も視野に入れて，研究の優劣の基準に関わる問いを立てる．私自身が自分の研究をどう評価し，その事後処理をどう計画しているかということには，当然のことながら，研究の優劣について私が――往々にして無意識のうちに――抱いている価値観が反映されているはずだからである．

## 2. 事例研究：「ベルクソンの潜在性概念」

### 経過の記述

#### 〔発表の背景〕

ここで検討するのは，発表「ベルクソンの潜在性概念」(Murayama 2016) である．周知のとおりドゥルーズは，『ベルクソン哲学』(Deleuze 1966) におい

て，「潜在性」をベルクソン哲学のキー・コンセプトとして設定した[21]．ずっと見落とされてきたが，実はこの概念こそがベルクソン哲学の中核をなしているのだ，というわけである．そして，ベルクソン『物質と記憶』を主な典拠として，この概念について鮮烈な解釈を提示した．その解釈は，その後の半世紀以上に亘ってベルクソン研究に影響を及ぼしつづけている．ただし私自身は，以前から，ドゥルーズの潜在性解釈はあまりベルクソンに忠実ではなく，やや派手に解釈しすぎではないか，という疑念を抱いていた．ベルクソンの『物質と記憶』をめぐるシンポジウムで発表しないかという誘いを受けたので，その機会に調査してみることにしたわけである．

それでは，どう準備したか，最終的にはどのような構成にしたか，発表後に成果物をどう処理ないし運用したか，順を追ってまとめておく．

〔準備[22]〕

(1) まず，ドゥルーズの潜在性解釈は間違いかも，という感触があった．そこで……

(2) ベルクソンとドゥルーズにおける「潜在的」という語の用例集を作成した．ベルクソン『物質と記憶』については，「潜在的」ならびにその派生語（「潜在性」「潜在的に」）だけでなく，関連語（類義語，対義語など）もすべて拾い上げた．ベルクソンの他の著作と，ドゥルーズ『ベルクソン哲学』については「潜在的」とその派生語だけ拾い上げた．

(3) 用例集をもとに，ベルクソン本人の潜在性概念と，ドゥルーズの解するベルクソンの潜在性概念との意味を確定した．ドゥルーズによる解釈は正確でなく，解釈の手続きもかなり杜撰であることが判明した．

(4) その成果だけでは発表内容として不十分なので，この成果がどれだけの波及効果をもつか思案した．波及する先として，『物質と記憶』のある箇所，ある章，著作全体，ベルクソン哲学全体……の解釈に加えて，そうした箇所が哲学的議論としてもつ妥当性などを考えた．

(5) 以上を踏まえて案を練り，全体の三分の二くらいまでおおよその内容が決まった段階で書き始めた．

なお，もちろん，この順番で整然と進んだわけではない．(2) から (5) は同時進行と言ってよく，いちばん重点を置く作業がこの順番で推移したといった

ところである．どれ一つとして，他の作業の助けなしに首尾よく行なうことはできず，大抵は，相互調整しながら全体として少しずつ精度を上げていくことになるからである．

〔発表の構成〕

(1) ベルクソンの潜在性概念についてのドゥルーズによる解釈は，手続きが不誠実であり，解釈自体も誤りと言ってよいことを最初に指摘する．

(2) 次に，「潜在的」という語が頻出する，『物質と記憶』第一章と第三章のそれぞれについて，「潜在的」という語の意味を確定させつつ，章全体の目的を確認し，議論の概略を辿る．そのことをつうじて，ドゥルーズのように解してしまうとベルクソンの議論が見て取りにくくなることを示す．

(3) ドゥルーズによる解釈のさらなる悪影響として，ベルクソンが後年に行なった可能性概念の批判についても，議論を誤解させると主張する．

(4) 最後に，悪影響を取り除いたときに見えてくるベルクソン哲学の姿を，ある種の合理主義と特徴づける．

〔事後処理〕

シンポジウム論集に寄稿した際には，上記「発表の構成」のうちの，(1) と (2) だけでまとめた（村山 2017）．(3) で論じた可能性概念についての議論を練り直す時間がなかったせいもあるが，(1) と (2) だけで，つまりは，潜在性概念だけを主題にしてまとめたほうが，論文としての緊密度が高まると考えたからである（私の場合，というか，多くの人がそうしていると私は思っているが，シンポジウムでは，広く興味をもってもらうため，話題をやや拡散させることがある）．その後，「ベルクソンにおける潜在性と可能性批判」という主題で解説論文を依頼されたので，主に (2) と (3) でまとめるつもりである[23]．(4) の論点は，いまのところはシンポジウム用にちょっと言ってみただけにとどまっている．

### 作業についての問い 1：「なぜ私はこんなによい用例集を作れたのか」

発表をめぐる一連の過程は以上のとおりである．これ以降は，いまの記述をもとに，いくつかの問いを立てていく．まずは作業について二つの問いを立て

たい．すなわち，なぜ私は用例集が作れたのか．そして，なぜ意味を確定することができたのか．

では第一の問いから．なぜ私は上記のような用例集を作れたのか．そんなのは単純な話だ，と思われたかもしれない．面倒ではあるが，著作を冒頭から読むか，電子ファイルにして検索でもかけて，抜き出して並べればよいだけではないか，と．ところが，とりわけ今回のような，語義を確定するための用例集の場合，作るのはそれほど簡単ではない[24]．

まず，大抵の場合，ある単語の意味は，その単語が出てくる文章だけを読んでも判定できない．例えば，『岩波仏教辞典』第二版で「不調（ふちょう）」を引くと，「この二人ははなはだ不調のものどもぞ．心ゆるしなせそ」（北野天神縁起）という例文が載っている．単語が出てくる箇所だけを機械的に拾っていたら，「この二人ははなはだ不調のものどもぞ」しか抜き出さず，「心ゆるしなせそ」のほうは削っていたかもしれない．さて，この箇所だけから，この辞典が記載する，「調和しない」「ふゆきとどき」という意味を読み取ることができるだろうか．控えめに言って，至難の業であろう．だから，意味の確定に役立つ程度には，前後の文章も引用しないといけない．では，どのくらい引用すればよいのだろうか．引き続き，いまの「不調」の例で考えてみよう．——「心ゆるしなせそ」とあるから，体調が悪いという意味ではなさそうだ．いや，もしかしたら，直前の箇所で疫病が話題になっており，「この二人も体調が悪いから警戒しろ」という意味なのかもしれない．では，少し遡ってみよう．しかし，遡ってみて，疫病の話が出てきたとしても，そのことは，「ここで「不調」とは「体調が悪い」という意味である可能性がある」ことしか示さない．だとしたら，上記の文章のあとにこの二人がどう振舞うのかも調べておいたほうがよいだろう．——といった具合に，意味が不確定な場合，さまざまな選択肢が想定できるので，どのくらい前後を引用するのかはそのつど判断しなくてはならない．究極的には一冊すべてを引用することになるが，それでは用例集として役に立たない[25]．極端なことを言えば，ここには，ある種のメノンのパラドックスがある．意味を知らないなら，有益な用例集は作れない．しかし，意味を知っているなら，有益な用例集など作る必要はない．

それだけではない．先ほど，準備 (2) のところで書いたように，私は，「潜

在的」に関連する語（類義語，対義語など）の用例集も作成した．実際に収集したのは，「顕在的」「行動へと促す」「無力な」「現前している」「無意識の」といった語の用例であり[26]，実際にそれらは「潜在的」の語義を確定するうえで必須のものであった．だが，それらを集めようという判断を，私は何を基準に下したのだろうか．問題点が分かりやすくなるように言い換えればこうなる．語義が不明である状態で，類義語や対義語を拾い上げるなどということが，なぜ可能だったのか．

**作業についての問い1への答え：方言とのアナロジー**

残念ながら，十分な説明になっている答えを私はまだもっていない．ここでは，あるアナロジーを提案し，少しばかり展開することで，答えに代えたい．すなわち，ベルクソンのテクストと方言とのアナロジーである．これを用いると，先ほどの問いにはこう答えることになる．上記のパラドックスを乗り越えて用例集を作れたのは，私が，ベルクソン語という方言のリテラシーを身に付けているからである．

身も蓋もない回答と思われるかもしれない．「私はベルクソン語が読める」と言っているだけにも見えるからである．だが，方言とのアナロジーにはいくつかの眼目がある．そもそもアナロジーは，何かを証明するためではなく，強調したいポイントを際立たせるためのものである．以下では，言葉遣いの特殊さを指摘するときによく用いられるもう一つの言葉，「ジャーゴン」と対比させながら，方言とのアナロジーがもつ眼目を二つ取り出しておく．なお，念のために付記しておくと，「方言」という言葉を使うからといって，どこかに標準語があるといったことはまったく想定していない．

まず，一般的に言って，ジャーゴンとは，ある哲学者や，その人に影響を受けた哲学者によって，意識的に導入された，特殊な用法のことである．そのため，哲学史研究において「ジャーゴン」という語を用いると，そうした哲学者（たち）を孤立した党派のように扱うことになりがちであり，かつ，意識的に導入された用法だけに議論が限定されがちである．それに対して「方言」という語は，周囲には多様な方言があり（例えば，デカルト方言の周りには，後期スコラ方言やライプニッツ方言が存在している），遠近さまざまな類縁性によっ

て繋がっていること，また，専門用語であれ，ごくありきたりな語であれ，著者本人が意識していないとしても，特殊な仕方で用いられている場合がありうることを示唆することができる．

次に，ジャーゴンは，一つ一つの単語の単位で問題にされることが多い．それに対して「方言」という語は次のことを明瞭に示す．すなわち，言葉遣いの特殊性は，語と語のネットワークにおいても――同義語，類義語，対義語に加えて，動詞と目的語の連結や，名詞と形容詞の連結といった，コロケーションのレベルにおいても――見出されるということである．実際，「潜在的」という語の意味を確定する際にも，類義語や対義語，そして「主にどの名詞を修飾しているか」という情報は不可欠であった．

遅ればせながら，いま指摘した眼目こそが，ここで論じているアナロジーの本質的な点である．すなわち，ある哲学者のテクストがそれなりに読めることと，方言が分かることは，どちらも，必ずしも明示されていないルールによって結びつけられた語のネットワークへの習熟を必要とするのである．ただしもちろん，その習熟は，そうしたルールやネットワークを辞書や文法書のような仕方で説明できることを含まない．大まかな意味や繋がりをまずまずの精度で推測できさえすればよいのである．かつてプラトンは，メノンのパラドックスを，「知っている」と「知らない」との中間状態――「知っているが忘れている」状態――を設定することで解こうとした．たったいま述べた点を踏まえるならば，方言とのアナロジーも，それに類した回答と言えるかもしれない．

最後に一つだけ．以上のことは，ある哲学者のテクストに親しむうえでの解説書や用語集の限界を示唆しているかもしれない．そうした，方言で言えば文法書や単語集のようなものは，習熟するための労力を大幅に軽減してくれる．そのことは疑いえない（この点については結論部でもう一度触れる）．とはいえおそらく，そうしたものは，とにかく大量に読むこと――場合によっては，大量に話したり書いたりすること――の必要性を消し去ってはくれないのである．

以上の点はどれもさらなる検討に値する論点であるが，いまはその余裕はない．そろそろ二つめの問いに移ることにする．

**作業についての問い2：なぜ意味を確定することができたのか**

二つめの問いは，「潜在的」という語の意味の確定はいかにして可能であったのか，である．ちなみに，「潜在的」という語が記憶を形容しているときの語義を確定するにあたって決め手となったのは，次の三つの箇所であった（傍点は引用者による）．

> 私たちは「潜在的な状態」から出発し，それを徐々に［…］終点まで導いていく．終点において，潜在的な状態は，現実的な知覚のうちに物質化する．すなわち，意識に現前して私たちに行動を促す状態へと移行する．(Bergson 1896/2008: 269-270)

> 純粋記憶は，潜在的なので，知覚に引き寄せられることでしか現実的になることができない．無力なので，［…］自らの生気と力とを感覚から借りる．(Bergson 1896/2008: 142)

> 心理の領域において，無力とは無意識を意味する．(Bergson 1896/2008: 197)

導出の詳細はいまは措く[27]．ポイントは，「潜在的」という語を含んでいない文章もリストアップされていること，また，そのことからも分かるとおり，普及版で全二八〇頁ある『物質と記憶』のなかからこの三箇所を抜き出し，証拠として掲げるのは，アルゴリズムに簡単に落とし込めるような作業ではないということである．

**作業についての問い2への答えと，さらなる二つの問題**

回答するのはそれほど難しくないように見える．すなわち，意味を確定できたのは，自分のベルクソン語リテラシーを頼りに，仮説を立てては用例集を読み直し，できるだけ多くの——理想的には，すべての——用例を統一的に説明できる語義を探したからである[28]．だが，一見自明なこの回答も，少し反省してみれば，そのままで受け入れられるものではないことが分かる．

まず，ブローも指摘するように[29]，この探求には，科学哲学で言うところの

決定不全性（underdetermination，過少決定とも訳される）がつきまとう．用例集や，当時の書籍，辞書などからどれだけデータを集めたところで，往々にして，解釈は一つには定まらない[30]．もし私が，ドゥルーズによる解釈は間違っていると確実に示せているのだとしても，私の解釈だけが可能な解釈だとまで言い切ることはできない．他の整合的な読み方の可能性は，あくまで開かれているのである．

ここにはさらに，大抵の単語は多義的だという厄介な事情も付け加わる．先ほど，「すべての用例を統一的に説明できる語義」が「理想的」であると述べたが，この事情を考慮に入れると，必ずしもそうではないかもしれないという疑念が生じてくる．スキナーはかつて，思想史研究者が陥りがちな「一貫性の神話 (mythology of coherence)」――対象となる作者やテクストが緊密な一貫性を備えているはずだという予断――を批判した[31]．これをもじって言えば，統一的語義という理想は，「一義性の神話 (mythology of univocity)」とでも呼ぶべき予断を前提していることにならないだろうか．つまり，研究対象となる作者は，たとえ明示的に定義していなくても，どの単語も一義的に（ないし，できるだけ少数の語義で）用いているはずだという予断を前提していることにならないだろうか.

ここで「一義性の神話」と名づけられた予断は，少なくとも作業仮説としてであれば，有効な，ないし理に適った方針なのではないか，と思われるかもしれない．しかし問題は，その方針が有効であるとか理に適っているとかいうことに，経験則以上の根拠があるのか，ということである．語というのは原則的には一義的に用いられるものだ，というのであれば，この方針も理に適ったものでありえよう．しかし，ほとんどの語は多義的に用いられるのが常態である以上，この方針には取り立てて根拠がないように見える．私が「神話」という語で強調しようとしているのは，この根拠のなさに他ならない.

決定不全性への対処と，一義性の神話の問題，どちらにも，簡潔明瞭な回答を与えることはできない．決定不全性については次の問いへの答えのなかであらためて触れる．その際には，決定不全性というのが，克服すべき欠点であるように見えて，実は哲学史研究にとって利点であり，その興味深さの大きな部分を構成していると論じるつもりである．しかしいまはその話は措き，ここで

は，一義性の神話についてだけ，いくらかの考察を行なっておきたい．

確かに，あらゆる用例を一義的に解釈せよというのは，要請として強すぎるのはもちろんのこと，理想（努力目標）としても高すぎる．到達するのが難しいという意味ではなく，そもそも目指すべきではないという意味で，高すぎるのである．実際，哲学史研究者であれば，ある箇所について「同じ単語，同じ言い回しなのだから，同じ意味に取るのが自然だ」と主張し，別の箇所については「同じ単語，同じ言い回しだからといって，同じ意味に取るのは牽強付会だ」と主張するのは，よくあることだろう．しかし，語義の幅にいかなる制限も設けないとすると，解釈の正しさを判定するうえで大きな影響力をもつ基準が一つ失われてしまう．単語の登場箇所がどれほど近くても，そのつど異なる意味で読むような，かなりアクロバティックな解釈も，できるだけ少数の語義で整合的に読もうとする解釈と同じもっともらしさをもつことになるのである．私としてはこれは受け入れがたい事態だが，それは私が，語義はできるだけ少数がよいという予断をもっているからであろう．

ただし，そうした論点先取をせず，かといって過剰にアクロバティックな読解を許容することもなしに，語義の解釈に一定の制約をかけることはできる．それは，著者は読者に向けて書いているはず，言い換えれば，一定の知識と理解力があれば理解できるように書いているはずであり，その想定を逸脱する読解はもっともらしくない，という制約である[32]．こうして，「著者は（一定の条件を満たせば）理解できるように書いているとなるべく想定せよ」という原理，いわば「想定読者の原理 (principle of intended reader)」を立てることができる．語義の数の多寡と，解釈の良し悪しとのあいだに，何の関係も設けていないところが，一義性の神話との大きな違いである．

注記しておけば，これはいわゆる「寛容の原理 (principle of charity)」――解釈対象の合理性を最大限に見積もれ，という原理――とは異なる．もちろん，哲学史研究者も，合理性を最大限にしようとはするだろう．しかし，既に指摘した決定不全性ゆえ，往々にして，それだけでは解釈は一つには定まらず，どれもいちおうは合理的な解釈が，二つ以上存在することになる．それゆえ，何かしらの基準を使って，解釈を絞り込んだり，解釈のあいだに優劣をつけたりしなくてはならない．しかし，これも前述のとおり，語というのは基本的には

多義的である以上，語義が少ないかどうかは，篩（ふるい）としても，優れた解釈の指標としても役に立たない．こうした状況において，解釈を多少なりとも絞り込むのに用いうるのが，想定読者の原理なのである．想定読者の原理は次のことを解釈者に要請する．すなわち，著者の想定していた読者がもっていたであろう知識や，著者が何を言うかについてそうした読者が抱いていたであろう期待を考慮に入れること，さらには，そうした読者の知識や期待について著者自身がもっていたであろう予想を考慮に入れること，である．簡単にまとめるなら，読者はどの程度の理解力をもっていると著者は予想していたのか（ないし，どの程度の理解力をもつ人を読者として想定したうえで書いていたのか）を考慮せよ，ということである[33]．

この原理によって，少なくとも，整合的ではあるがあまりにアクロバティックな解釈などは，もっともらしさが低いとして斥けることができるだろう．確かに，それほど歯切れのよい原理ではない．これは，せいぜいのところ，哲学史研究をするうえで有用な経験則――一義性の神話よりは実情に即している経験則――といったところである．だが，この煮え切らなさこそが，哲学史研究の面白さを支えてもいる．このことについては，この第二節の終わりで，また問題にするつもりである．

### 優劣の基準についての問い：何を言えば発表として十分なのかをめぐって

それでは，事例研究の後半に移ろう．ここからは，優劣の基準に関わる問いを二つ考察する．ただし，関連させつつ答えることになるので，まずは二つの問いを併せて立てておこう．

準備について記述したとき，私は次のように書いた．すなわち，ドゥルーズによる解釈の批判という「成果だけでは発表内容として不十分なので，この成果がどれだけの波及効果をもちうるか思案した」，と．その結果として，発表においては，『物質と記憶』に加えてベルクソンの他の論文も検討し，潜在性だけではなく他の話題（ベルクソンにおける可能性概念）に，さらにはベルクソン哲学の全体像にまで話を広げたわけである．ここで私が問いたいのは次のことである．「この成果だけでは発表として不十分だ」とか「これぐらいのことが言えれば十分だ」といった，研究が成果発表として十分な価値をもつかど

うかの判断を，私はどのように下したのだろうか.

この問いは，二つめの問いを併せて考えると難しさが増す．すなわち，なぜ私は発表内容を切り売りすることができたのか，という問いである．発表の事後処理について記述したときに書いたことだが，口頭発表を構成していた四つの部分のうち，第一，第二の部分で既に一つの論文としてまとめてあり，これから第二，第三の部分でもう一つの論文を執筆する予定である．しかし，そもそもは，四つ併せて一つの発表として十分になるように構想したのではなかったのか．なぜ，その四つのうちから，それだけでは不十分だと判断したはずの二つを取り出して論文にすることができたのか．しかも，ごく単純化した話をすれば，論文というのは，問題提起，考察，結論という三つ組みで一まとまりになっているはずのものである．そのなかから，そのつど違う箇所を抜き出して違う論文に仕立てあげるなどということが，なぜ可能になっているのだろうか.

**優劣の基準についての問いへの答え：哲学史研究の価値は多様に語られる**

どちらについても，同じテーゼを用いて答えることになる．哲学史研究の価値は多様に語られる，というテーゼである．実際，優れた哲学史研究を優れたものたらしめている価値にはさまざまなものがある．思いつくままに列挙するだけでも，(A) テクストへの忠実さ，(B) 先行研究との違いの大きさ，(C) その違いが影響する範囲の広さ（ある段落だけの解釈にとどまるのか，ある章，著作，哲学者，時代などの捉え方にまで及ぶのか），(D) 哲学的議論としての価値，(E) 一つの論文としての緊密さ，(F) 含まれた話題の豊富さ，(G) そうした要素の総合として研究がもつ面白さ，などがある.

このことを踏まえたうえで，先に提示した問いに答えよう．**問い** 1：研究が成果発表として十分かどうかはどう判断しているのか．**答え**：上記の諸基準を考慮して，総合的に判断している．**問い** 2：なぜ研究成果を切り売りできているのか．**答え**：とりわけこの発表「ベルクソンにおける潜在性概念」の場合，ドゥルーズを批判した第一部分は価値 (A) と (B)，その批判が『物質と記憶』読解にとってもつ重要性を指摘した第二部分と，可能性概念の理解にとってもつ重要性を論じた第三部分は，ともに価値 (C) だが，それぞれ扱った範囲が異

なる，というように，四つの部分相互の独立性が高く，それぞれが異なる価値をもっていた．そのため，一部を取り出して新しいまとまりを作ることが，それほど難しくなかったのである．ただし，たんに他の部分を削ぎ落とすだけだと，上記の価値 (E) は向上するかもしれないが（実際，先述のとおり，その点も，切り売りの際に考慮した点の一つであった），大抵の場合，総合的な価値は低下する．そのため，第一，第二の部分だけで論文にしたときには，それぞれの価値を高めるよう心掛けた．具体的に言えば，ドゥルーズ批判をできるだけ徹底的なものにするとか，『物質と記憶』の読解を少しだけ詳細なものにするといったことである．

先ほど掲げた，価値の一覧について，いくつかの補足的考察を行なっておきたい．第一に，あの一覧はもちろんまだ完全ではない．つまり，おそらくまだ網羅的ではないし，項目もなお細分化の余地がある．一覧の網羅性という点を改善するには，まずは科学の理論的美徳を参照するのが取り組みとして有望だろう．すると，例えば単純さ（語義の少なさ？）は哲学史研究においても美徳なのか，実り豊かさ（新しい発見を促す力）を哲学史研究において問うことはできるか，といった問いがまずは浮かんでくる[34]．また，項目の細分化について言えば，例えば，価値 (D) として「哲学的議論としての価値」を挙げたが，議論の価値と一口に言っても，解釈対象と同時代の人びとの常識や科学的知識を前提としたうえで価値を評価するのか（例えば，聖書に書かれていることは真であると前提したうえで，ライプニッツによる神義論を評価する，など），そうした限定を設けずに，いわば私たちと同時代のものと見なしたうえで価値を問うのか――言い換えれば，妥当性だけを問題にするのか，健全性も問題にするのか――は別のことである．こうしたさまざまな考察を行ないながら，あの一覧を改善していくことは，哲学史研究についてのメタ哲学が扱ってよい論点の一つであろう．

また別の論点として，あれらのさまざまな価値は競合しうる，ということがある．とりわけ問題になりうるのが，テクストへの忠実さという価値と，それ以外の価値との関係である．価値 (A) は，他の価値を高めるうえでの妨げになることが多い．新しい読解や，面白い読解，現代の枠組みから見て容易に理解可能な読解などを提示しようとすると，テクスト解釈は往々にして我田引水に

なる．デイヴィドソンはかつて，哲学において明晰さ (intelligibility) を増しつつ興奮を保つのは難しいと述べたが（「概念枠という考えそのものについて」第三段落），哲学史研究において，テクストへの忠実さを高めつつ興奮を保つのもまた難しいのだ．

ここで，やや独断的に私の意見を述べるなら，そうした事態に直面したときには，テクストへの忠実さを犠牲にすべきではない．テクストという足枷をほどいて，根拠の乏しいストーリーを語ったり，解釈対象の真の意図を云々したり，創造的誤読などといった言葉を引き合いに出したりすることは，捏造か，降霊術か，虎の威を借る振舞いかであって，もはや哲学史研究ではないのである．もちろん，解釈対象である哲学者も，自らが考えたことをいつも正確に文章にしえているわけではあるまい．誰しも，いい加減に書き流したり，誤解を招く書き方をしてしまったりすることはある．しかしそうした想定に基づく解釈は，基本的には，優先順位の低いオプションにとどまるべきであるように思われる．

さて，では，私たちにできるのは，テクストに即して淡々と事実を語ることだけなのか，といえば，もちろんそんなことはない．ここで重要になってくるのが，これまで幾度か指摘してきた，テクスト解釈という作業につきまとう本質的な曖昧さ――「一義性の神話」は維持しがたいこと，「想定読者の原理」の歯切れの悪さ，そして決定不全性――である．

どういうことか．ここでは具体例よりはむしろ抽象的な例のほうが分かりやすいと思われるので，ごく図式的に説明しておこう．ある哲学者の，ある著作のなかで，ある箇所についてはＫとＬとＭという三とおりの解釈が可能であり，別の箇所についてはＮとＯという二とおりの解釈が可能であるとしよう．このとき，二つの箇所を併せてどう読むかについては，単純に言って六とおりの解釈があることになる．そして，どれもテクストに忠実なのであれば，あとは面白さやストーリーの作りやすさといったさまざまな基準をもとに選べばよいのである．もちろん，ＫとＮを組み合わせると，解釈対象である哲学者に矛盾した信念をもたせることになる，といった場合には，その選択肢の優先順位は下げるのが自然だろう．だが，優先順位が下がるだけであって，切り捨てられることはない．解釈対象である哲学者が（少なくとも一見して）矛盾する信

念を抱いていたのかもしれないし，あえて矛盾した主張を行なうことで何かを意図していた可能性もあるからである．

もちろん，いま述べたような特殊な理由がない限り，解釈対象に矛盾を帰属させる選択肢はできるだけ取らないほうがよい．また――私自身がドゥルーズに対して行なったように――解釈が杜撰だとか，間違っているとか，もっともらしくないとかと指摘することも，あくまで可能である．裁量の余地が大きいというのは，何をしてもよいということを意味しないのだ．かくして，テクストへの忠実性を高めることで，いくつかの選択肢がおよそありえないとして否定されることはある．しかし，どれだけそうして選択肢を減らしたところで，テクスト解釈に根本的につきまとう曖昧さゆえに，解釈者に残された裁量の余地は，どこまでも広大に残りつづけるのである．

## 3. 結論

本稿は，実にさまざまな問題を扱ってきた．最後に，それらを一つのストーリーのもとにまとめておこう．ただし，第一節は基本的にはメタ哲学の解説なので，ここでは省略する．以下では，第二節の主要な論点を，論文執筆のプロセスに沿って再構成しながら述べ直してゆく．なお，事例研究の利点をここであえて再説することはしないが，少しでも目新しい論点を，多少なりとも一般的な仕方で提示することができているなら，事例研究から始めた本稿の考察の目的は，ひとまず達成されたことになる．

第二節がまず話題にしたのは，哲学史研究のなかでも極めて基礎的な，言うなら**準備**に関わること，すなわち用例集作りであった．メノンのパラドックスに似たパラドックスも提示しつつ，そこで私はこう論じた．特定の哲学者なり時代なりについての用例集という基礎資料を作るには，いわば，その対象に固有の方言を読む能力，方言リテラシーが必要である，と．

この論点については，このリテラシーなるものが何によって構成されているのかをさらに分析することが，残された課題の一つであろう．本論では，リテラシーの主な構成要素の一つとして，テクストの内部における語のネットワークに触れた．その他の構成要素としては，研究対象となる哲学者がそのテクス

トを書いたときの社会状況や政治状況や学問状況などについての知識，場合によっては，人間関係についての知識さえもが候補となりうる．さらに，いま列挙した要素についても，それぞれを分析にかけることができる．例えば，語のネットワークはどんな形をしているのか（ツリー型なのか，メッシュ型なのか……），哲学における語のネットワークに固有の形はあるのか，といった問いを考えることは，哲学史を研究するうえで留意しておいてよいことである[35]．ネットワークをツリーにまとめやすい哲学者や，扱う主題ごとに独立性の高いネットワークを作る哲学者など，ネットワークの作り方で哲学者を分類したりもできるかもしれない．また，「社会状況」と一口に言っても，研究主題が認識論なのか，存在論なのか，政治哲学なのかによって，何を，なぜ，どの程度踏まえるべきなのかは変わるであろう．かくして，分析すべきことは，まだ数多く残っている．こうした分析は，それ自体として興味深いだけではない．リテラシーの効率的な学習法を考案しようという場合には，ほとんど不可欠とさえ言うべきものである．

さて，第二節は次いで，**解釈**の場面に関わることを扱った[36]．すなわち，一方では，どれだけ証拠を集めても解釈は一つには定まらないという，決定不全性と，少ない語義で解釈すればよいわけではないという，一義性の神話の信じがたさを問題にした．これらはどちらも，あるテクストについて許容される解釈の幅を広げるように働くものである．しかし他方で，解釈の自由度に制限をかけるものについても私は論じた．すなわち，どんなテクストも，一定の条件を満たせば理解できるように書かれているはずだという，想定読者の原理と，哲学史研究が備えるべき理論的美徳としての，テクストへの忠実さである．これらによって，あまりに野放図な解釈は斥けることができるし，忠実さの度合いに応じて，解釈のあいだの優劣を論じることもできる．忠実さは度合いを容れるからである．とはいえ，これら二つのどちらも，解釈の幅を，ある程度まで制限するものではあるが，それほど狭めるようなものではない．言い換えれば，すべてが許されているわけではないのだが，だからといって，一つ（ないし少数）しか許されないというわけでもない．「すべてが許される」と「一つしか許されない」という両極端のあいだには，かなり広いスペースが開けている．哲学史研究とは，基本的には，その空間のなかを動く（べき）ものなので

ある．

最後に論じたのが，**仕上げ**に関わること，すなわち，成果物の評価基準の問題であった．本論で述べたのは，煎じ詰めれば，哲学史研究の価値は多様に語られる，ということである．既に挙げた，テクストへの忠実さのみならず，要点をまとめる手際の良さ，先行研究との違い，影響が及ぶ範囲，哲学的議論としての価値，論争喚起力，さらには，それらを総合して下される「面白さ」という趣味判断……．他にはどのような理論的美徳がありうるのか，実は美徳とすべきではないものが過剰に重要視されていないか，といったことは，それ自体として検討する価値のあることであろう．

もう少し抽象度を下げた話をするならば，例えばアリストテレス研究，デカルト研究，ヘーゲル研究……それぞれを対象にして，その業界ではどのような美徳が尊重されているか，ないし，尊重されたほうがよいかを考えることも有益である．人びとがそれぞれの哲学者からいかなる滋養を得ようとしているのか（アーギュメントなのか，洞察なのか，霊感なのか，ショーヴィニズムの糧なのか……），どの哲学者にはどの滋養を求めるのが適切で，どんな滋養は得られそうもないのか，ということは，それぞれ異なるだろうからである．ライプニッツ研究において重要な美徳が，レヴィナス研究においてはあまり重視されない，ということはありうる．そしてそのことは，一方の業界が他方の業界より優れているとか，研究対象である哲学者の一方が他方より偉いとかいったことを意味するわけではない．哲学者それぞれに応じて，適切な研究の仕方があり，重視されるべき美徳があるという，ただそれだけのことに過ぎないのである．

さて，研究を評価する基準をめぐる考察は，さらに抽象度を下げることもできる．すなわち，いつの時代に，どの地域でなされた，誰（ないし，何）についての研究なのか，というところまで考慮に入れて，どんな評価基準が尊重されている（べき）かを考えることもできるし，おそらくは――論文や著作を読むうえでも，書くうえでも――考えたほうがよい．極端な例を出せば，ルネッサンス時代のプラトン研究と，二〇世紀前半のプラトン研究と，現代のプラトン研究とで，評価基準は当然異なる，ということである．およそ研究とは集団作業であり，一定の先行研究を背景に，一定の読者に向けて，何かしらのイン

パクトを及ぼすためになされる．それゆえ，ある哲学史研究の著者の意図を読者として読み取るためには，その著者がどのような評価基準のもち主を相手にしていたかを考慮したほうがよいし，自らが著者として，読者に対して効果的にインパクトを与えるためには，読者たちがどのような評価基準をもっているかに配慮したほうがよいのだ．これは，言い換えれば，一次文献を読むときのみならず，二次文献を読んだり書いたりするときにも，想定読者の原理は有効なものでありうる，ということであろう．

なお，論文執筆の際には読者層のもつ価値観に配慮したほうがよい，ということは，必ずしも，読者や既存の価値観に迎合したほうがよいということを意味しない．他の人たちがあまりにもテクストを（知ってか知らずか）軽視しているので，「もっと真面目にやろう」と呼びかける意図で，テクストへの忠実さをやや過剰に強調する論文を書く，ということもまたあろうからである．もちろん，話がここまでくると，もはや論証（ロジック）というよりは説得（レトリック）の問題であろう．しかし，哲学においても説得の技法は軽視されるべきではない．繰り返しておけば，哲学も含め，研究とは集団作業である．集団作業にはコミュニケーションが不可欠である．そして言うまでもなく，円滑なコミュニケーションには，レトリックが不可欠なのである．

## 註

[1] 二〇一九年度の哲学若手研究者フォーラム（七月十三 - 十四日，国立オリンピック記念青少年総合センター）の初日に行なったテーマレクチャーに基づく．レクチャーのテーマはメタ哲学，講師は笠木雅史氏と私，合同タイトルは「ボトムアップ型メタ哲学の正当化と実践：哲学と哲学史研究の事例から」であった．私のレクチャータイトルは「哲学者たちの反省会：あるいは，メタ哲学の上でのベルクソンと野球選手との出遭い」であったが，論文にするにあたって，簡潔に，かつ内容が分かりやすいように改めた．また，レクチャーでは私の二つの発表を題材に事例研究を行なったが，話題が拡散しすぎないよう，論文では二つめの事例研究（Murayama 2019 が対象のもの）は割愛した（結果として，哲学史研究だけを扱うことになった）．準備稿からレクチャーそのものを経てこの最終稿に至るまでに質問やコメントをいただいたさまざまな方たち，さらに，本稿の分析対象となった論文にコメントをいただいた方たちに感謝したい．なお，本研究は科研費 17K02158 の助成を受けたものである．

[2] 自己分析に基づくメタ哲学というアイディアは，もともとは，応用哲学会（二〇一九年四月二〇日，京都大学）におけるワークショップ「哲学的という神話：哲学教育とは何をすることなのか」での，笠木雅史の発表「「哲学的」という神話：哲学教育の自

律性と他律性」のなかで提唱されたものである．

[3] 一つもないわけではない．類似のものとして，事例研究という点では Gutting 2009 とブロー2015/2019 を，自分自身を題材にしているという点では稲村 2019 を挙げることができる．断片的な考察でよければ，論文や著作（とりわけ論文集の序文など）の他にも，研究者の回顧録やインタビューなどから数多く拾い集めることができるだろう．なお，言うまでもなく，哲学史上にも類例と言えなくはないものは存在する．デカルト『方法序説』，スピノザ『知性改善論』冒頭部，ニーチェ『この人を見よ』，ベルクソン『思考と動くもの』第一序論などである．ただし，この一覧から分かるとおり，参考にするのはなかなか難しいものばかりである．

[4] テクストの文字どおりの意味と，テクストを書くことによって意図されていることとの違い，ならびにこの区別の重要性については，スキナー1969/1990: 87-93; 104-110 を参照されたい．なお，いま挙げた箇所の二つめのほう（104-110）では，「X を行なおうという意図」と「X を行ないつつある際の意図」との区別と，その重要性も論じられているが，この区別と上記の区別とは異なるので注意されたい．

[5] 哲学史研究を「哲学」の外延に入れるというこの用語法は，もちろん，論争の余地のあるものである．ただし，本稿ではこの点について論じることはできなかった．他日を期したい．

[6] この項の執筆にあたっては以下のものを参考にした．Cappelen et al. (eds.) 2016: Part III; Overgaard et al. 2013: ch. 2; 笠木 2019.

[7] Cf. W. V. O. Quine, ‘A Letter to Mr. Ostermann’, in C. J. Bontempo and S. J. Odell (eds.), *The Owl of Minerva: Philosophers on Philosophy*, McGraw-Hill, 1975: 228 (cited in Overgaard et al. 2013: 20).

[8] 詳しい説明は，鈴木（他）2014: 145-147 や倉田 2017: 51-62 を参照されたい．

[9] 規範倫理学は，意思決定の手続きを提供する役割も期待されているので，他の哲学理論とは異なる理論的美徳を要求されることがある（例えば，人間に入手可能な情報だけを用いて，具体的な行動指針を提供できること，など）．Cf. Hooker 2000: 4-29; Timmons 2013: 12-16; 児玉 2007: 12.

[10] 論点の選定にあたっては Overgaard et al. 2013: ch. 1 を参考にした．

[11] D’Oro and Overgaard 2017: 2.

[12] G. Ryle, *Collected Papers, Volume 2: Collected Essays 1929-1968*, Routledge, 2009: 331 (cited in D’Oro and Overgaard 2017: 2).

[13] この点については，Overgaard et al. 2013: 8 も D’Oro and Overgaard 2017: 2 も，ウィリアムソンの次の言葉を引いて反論を済ませている．「哲学は，自転車に乗ることとは異なり，それについて考えないほうが上手くできるというわけではない．というよりはむしろ，最良の自転車乗りなら，自分が何をしているのかについて，必ずや実際に考えているはずである．」(Williamson 2007: 8)

[14] Bergson 1889/2007: 145.

[15] Bergson 1889/2007: 145-146.

[16] Lechalas 1896: 121-122.

[17] Peijnenburg and Atkinson 2003: 309-310 の例（いわゆる「メアリーの部屋」の思考実験を用いたもの）を，ベルクソンの思考実験を題材にアレンジした．他にも，欺く神という思考実験によってデカルトは数学の証明さえも疑い (*Principia Philosophiae*, I-5)，数学の証明は疑いえないとライプニッツは言い (‘Animadversiones in partem generalem Principiorum Cartesianorum’, G IV: 356)，そもそもそんな懐疑（とりわけ夢の懐疑）は不

合理だとオースティンは言う（オースティン 1962/1984: 85, n. 5），といった例も挙げられよう．なお，その他の論点も含めた，思考実験に対する批判の簡潔なまとめとして，Daly 2010: 112-117 がある．

[18] 詳しくは笠木 2015 を参照されたい．

[19] Cf. 前田（他）2007: 261-262. 「リマインダ」の語は 262 にある．

[20] その際，「方法」という語は，便利ではあるが用いない．理由は以下のとおり．第一に，この語は用例があまりに雑多で，意味の確定が難しい．「方法／方法論」という二語が必ずしも明確に使い分けられていないという混乱に加え，手続き／アルゴリズム／方針／態度など，指示するものが多様すぎるのだ．それなら約定的に定義してしまえばよい，と思われるかもしれない．実際，あえて定義するなら，(i) 何らかの課題を解決することが期待され，(ii) 複数の対象や機会に適用可能で，(iii) 誰もが使用可能なことが望ましい，(iv) 明文化できる手続き，といったあたりに落ち着くだろう．ただし，とりわけ (iii) は曖昧であり，この曖昧さに，さまざまな政治的思惑が忍び込んでくる．何かを「方法」と称する際には，教授したり学習したりすることが可能なものである（「～メソッド」という名称のものに多い）とか，そこに分野や学派の独自性があるとか，汎用性があるので広く学ばれるべき（「～スキル」という名称のものに多い），などの下心が入り込みやすく，定義を適切に適用するのが難しいのである．本稿では，「作業」や「手続き」などの比較的ニュートラルな語を用いた．

[21] 正確に言えば，もう一つ，「差異」というのもキー・コンセプトになっており，この用語についての解釈の主な典拠は『意識の直接与件についての試論』である．

[22] ブロー2015/2019 は，ここで記述したような作業を，「一つないし複数の過去の出来事を，常に不完全で曖昧で解釈が必要な証拠によって説明しようと試みる」(132) という点で，犯罪捜査に擬え，興味深い考察を展開している．

[23] 念のために言い添えておくと，自己剽窃の問題については，研究倫理の専門家に意見を聞いたうえで，両方の論集の編者に連絡を取るという仕方で対応済みであり，二本目の論文でも，既発表のものと内容の重複がある旨を註で触れるつもりである．

[24] 今回はそれほど問題とならなかったので本文には書かないが，用例作りについて二つ付記しておきたい．まず，哲学史研究においては，「どの単語に注目して用例を調べるか」は，あるいはそれこそが，研究者のセンスや実力が問われる一つのポイントである（研究史上で注目されてこなかった何気ない単語であればあるほど，インパクトも際立つ）．二点めとして，語義を確定するうえでは，当時の辞書や論争，対象となる哲学者がもっていた哲学史の知識なども重要な情報源となる．いま述べた二点の重要性が如実に現れている例として，上野 2011 と所 1996 を挙げておく．

[25] しかも，それでも必要な情報が揃っていない可能性さえある．直前の註の二点めを参照されたい．

[26] それぞれ原語は « actuel », « agissant », « impuissant », « présent », « inconscient ».

[27] 要点だけ述べておこう．まず，一つめの引用から，「潜在的である」と「現実的である」が対義語であり，後者は「意識に現前しており，かつ，行動へと促す」と言い換えられていることが読み取れる．この二点を踏まえると，「潜在的である」は，上記の言い換えの否定，すなわち，意識に現前していないか，行動へと促さない（無力である）かのどちらかだ，ということになる．次に，二つめの引用からは，潜在的であることと無力であることとは区別されていることが読み取れる．以上を踏まえて，潜在的であるとは，意識に現前していないことだ，と結論づけたわけである．

[28] 対義語や類義語（らしきもの）が併せて登場する箇所を重点的に検討する，とか，言い換えがなされている箇所に注目する，などのティップスもなくはないが，細かすぎるので本稿では割愛する．

[29] ブロー2015/2019: 137-139.

[30] ここでの決定不全性は，決定実験の失敗の際に問題となるタイプのそれではない（哲学史研究において決定実験を行なうのは難しい．新資料の発見なら，辛うじて決定実験として機能しうるかもしれない）．ここで問題となっているのは，データを説明できる複数の理論からどれかを選択する場面で生じるタイプのものである. Stanford 2017 は，前者を ‘holistic underdetermination’，後者を ‘contrastive underdetermination’ と呼んで区別している．

なお，戸田山の言うところでは，「科学の実際の歴史で決定不全になったケースはほとんどな」く，「いくつもの可能な理論の中から一つに決められないということはめったに起こらない」そうだが （戸田山 2005: 188-189），哲学史研究では，大抵の重要な問題は決定不全である（決定不全であるからこそ重要な問題として残されている，ということもあるだろうが）．

[31] スキナー1969/1990: 65-74.

[32] 日記や秘教的継受などについては別立てで論じる必要があるが，基本的な方針としては変わらないであろう. 読者が自分自身や一部の弟子に限定されるだけのことである．

[33] いわゆる「寛容の原理」に，「解釈対象の正しさを最大限に見積もれ」という要請が含まれているとしたら，この点も，この原理と「想定読者の原理」との違いを構成することになる．哲学史研究者は，対象の正しさを最大限にすることを必ずしも目指さないからである．デカルトが「動物精気」という語で何を考えていたかを知るためには，デカルトの生理学が真であることにコミットする必要はないのだ．なお，ボルトロッティ 2015/2019 の 1.1 と 1.2 は，解釈を導く原理にはどのようなものがあり，それぞれどのような問題点が指摘されているかについての簡潔な見取り図を与えてくれており，たったいま触れた論点もそこで論じられている．

[34] 科学における理論的美徳としてどのようなものが提唱され，それらがどのように分類されてきたかについては，Keas 2018 に簡潔なまとめがある．

[35] その際にはもちろん，スキナーの指摘した「一貫性の神話」に陥らないよう気をつけなくてはならない．一人の哲学者においても，ネットワークそれ自体が――例えば初期と中期，後期のそれぞれにおいて――編成されなおすのは，むしろ自然なことだからである．思えば，「潜在性」を一つの根とするツリー（の成長）として，ベルクソン哲学における語のネットワークを統一的に再構成した――そして, 私の見るところ，失敗した――のが，ドゥルーズなのであった．

[36] 実際には，用例作りのようなごく単純に見える準備の段階から，解釈の作業は始まっている．そのことは本論で論じたとおりだが，いまはまとめのために，あえて単純化して話を進めておく．

## 参考文献

注記：外語の文献で，日本語訳を主に参照した場合，文献表では日本語文献のほうに載せ，補足として原著の情報を記した．ただし出版年については「原

著 / 翻訳」で表記した．ベルクソンの著作の出版年は「初版 / 校訂版」で表記した．

Bergson, Henri. 1889/2007. *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF.

Bergson, Henri. 1896/2008. *Matière et mémoire*, PUF.

Cappelen, Herman, Tamar Szabó Gendler, John Hawthorne (eds.). 2016. *The Oxford Handbook of Philosophical Methodology*, Oxford University Press.

Daly, Chris. 2010. *An Introduction to Philosophical Methods*, Broadview Press.

Deleuze, Gilles. 1966. *Le Bergsonisme*, PUF.

D'Oro, Giuseppina and Søren Overgaard. 2017. 'Introduction', in Giuseppina d'Oro and Søren Overgaard (eds.), *The Cambridge Companion to Philosophical Methodology*, Cambridge University Press, pp. 1-9.

Gutting, Gary. 2009. *What Philosophers Know: Case Studies in Recent Analytic Philosophy*, Cambridge University Press.

Hooker, Brad. 2000. *Ideal Code, Real World: A Rule-Consequentialist Theory of Morality*, Oxford University Press.

Keas, Michael N. 2018. 'Systematizing the Theoretical Virtues', in *Synthese*, 195, pp. 2761-2793.

Lechalas, Georges. 1896. *Étude sur l'espace et le temps*, Félix Alcan.

Murayama, Tatsuya. 2016. 'Bergson's Concept of Virtuality' (invited talk at the *International Colloquium: Diagnoses of Matter and Memory*, Hosei University, 10th November).

Murayama, Tatsuya. 2019. 'La valeur finale et, par conséquent, instrumentale de l'autre' (conférence invitée dans le cadre des *Journées d'étude internationales : Les valeurs de l'autre*, Université Grenoble Alpes, 7 mars).

Overgaard, Søren, Paul Gilbert, and Stephen Burwood. 2013. *An Introduction to Metaphilosophy*, Cambridge University Press.

Peijnenburg, Jeanne and David Atkinson. 2003. 'When Are Thought Experiments Poor Ones?', in *Journal for General Philosophy of Science*, 34: 2, pp. 305-322.

Stanford, Kyle. 2017. ‘Underdetermination of Scientific Theory’ (Winter 2017 Edition), in Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. URL = <https://plato.stanford.edu/archives/win2017/entries/scientific-underdetermination/>

Timmons, Mark. 2013. *Moral Theory: An Introduction*, 2nd edition, Rowman & Littlefield.

Williamson, Timothy. 2007. *The Philosophy of Philosophy*, Blackwell.

稲村一隆. 2019. 「テクストの分析と影響関係」, 『思想』1143 所収, pp. 82-98.

上野修. 2011.「残りの者 : あるいはホッブズ契約説のパラドックスとスピノザ」, 『デカルト, ホッブズ, スピノザ : 哲学する十七世紀』講談社学術文庫, 所収, pp. 20-57（『カルテシアーナ』8, 1988; 『精神の眼は論証そのもの』学樹書院, 1999）.

オースティン, J. L. 1962/1984.『知覚の言語：センスとセンシビリア』（丹治信治, 守屋唱進訳）勁草書房.

笠木雅史. 2015. 「実験哲学からの挑戦」, *Contemporary and Applied Philosophy*, 7, pp. 20-65.

笠木雅史. 2019. 「メタ哲学」, 納富信留, 檜垣立哉, 柏端達也（編著）『よくわかる哲学・思想』ミネルヴァ書房, 所収, pp. 212-213.

倉田剛. 2017. 『現代存在論講義 I』新曜社.

児玉聡. 2007. 「規範倫理学」, 赤林朗（編）『入門・医療倫理 II』勁草書房, 所収, pp. 9-15.

スキナー, クェンティン. 1969/1990. 「思想史における意味と理解」（塚田富治, 半澤孝麿, 加藤節訳）, 『思想史とは何か』（半澤孝麿, 加藤節編訳）岩波書店, 所収, pp. 45-140 (Quentin Skinner, ‘Meaning and Understanding in the History of Ideas’, *History and Theory*, 8: 1, pp. 3-53, reprinted in James Tully (ed.), *Meaning and Context: Quentin Skinner and his Critics*, Princeton University Press, 1988, pp. 29-67).

鈴木生郎, 秋葉剛史, 谷川卓, 倉田剛. 2014. 『ワードマップ 現代形而上学』新曜社.

所雄章. 1996. 「『省察』的用語の一考察：「praecise」について」, デカルト研究会（編）『現代デカルト論集 III：日本編』勁草書房, 所収, pp. 13-37（『中央大学文学部紀要』121, 1986; 一部改変して『知られざるデカルト』知泉書館, 2008 に「『省察』の一つの用語をめぐって」として採録．内容に大きな変更はない）.

戸田山和久. 2005. 『科学哲学の冒険』NHK ブックス.

中村元, 福永光司, 田村芳朗, 今野達, 末木文美士（編）『岩波仏教辞典』第二版, 2002.

ブロー, エイドリアン. 2015/2019. 「捜査活動としての政治思想史」（後藤大輔訳）,『思想』1143 所収, pp. 129-160 (Adrian Blau, ‘History of Political Thought as Detective-Work’, *History of European Ideas*, 41: 8, pp. 1178-1194).

ボルトロッティ, リサ. 2015/2019. 『現代哲学のキーコンセプト 非合理性』（鴻浩介訳）岩波書店.

前田泰樹，水川喜文，岡田光弘（編）2007. 『エスノメソドロジー：人びとの実践から学ぶ』新曜社.

村山達也. 2017. 「潜在性とその虚像：ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」, 平井靖史, 藤田尚志, 安孫子信（編）『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』書肆心水, 所収, pp. 20-36.